

## 論文

# 1970年代の『明星』読者ページにおける 読者共同体

——「ハローキャンパス」の事例分析を中心に——

田島悠来<sup>†</sup>

**要約**：本稿は、雑誌『明星』（集英社）、中でも、本雑誌の最盛期と目される1970年代の『明星』に着目し、雑誌の編集体制を捉えながらその読者ページの変遷を辿り、特に、読者ページ「ハローキャンパス」を中心にそこでどのような交流が図られていたのかを1970年代という社会的文脈の中で探ることを目的としている。

その結果、1970年代の『明星』は、進学率の飛躍的な伸びとそれによる「ヤング・マーケット」の導入を背景として発展し、雑誌としての「黄金の時代」を迎えるとともに、代表的な読者ページである「ハローキャンパス」では、「ヤング」であることを基盤とした共同体が形成され、「スター／アイドル」と読者や、編集者を介しての読者同士という双方向のコミュニケーションが展開されていたことが明らかになった。

**キーワード**：メディア文化、雑誌、読者、コミュニケーション、1970年代

## 目次

1. はじめに
  - 1-1. 研究の目的と問題の所在
  - 1-2. 『明星』とは
2. 1970年代という時代背景と『明星』
  - 2-1. 1970年代という時代背景
  - 2-2. 『明星』の転換期としての1970年代
3. 読者ページについて
  - 3-1. 『明星』読者ページの変遷
  - 3-2. 1970年代の読者ページ
  - 3-3. 「ハローキャンパス」とは
4. 「ハローキャンパス」の分析とその考察
  - 4-1. 「ハローキャンパス」の設置コーナーとその分類
  - 4-2. 読者-「スター／アイドル」交流型におけるコミュニケーションとその機能
  - 4-3. 読者-編集者／読者交流型におけるコミュニケーションとその機能
  - 4-4. 「明星アニキ」の存在とその機能
5. まとめ

<sup>†</sup>同志社大学大学院社会学研究科博士後期課程

\*2012年6月11日受付、査読審査を経て2012年10月17日掲載決定

## 1. はじめに

### 1-1. 研究の目的と問題の所在

本稿は、雑誌『明星』（集英社、1952年創刊。現『Myojo』）、中でも、本雑誌の最盛期と目される1970年代という時期の『明星』に着目し、雑誌の編集とその背景を捉えながらその読者ページ<sup>(1)</sup>の変遷を辿り、特に、読者ページ「ハローキャンパス」を中心に、そこでどのような交流が行われていたのかを導き出すことを目的とする。

これまで、マス・コミュニケーション研究の分野では、雑誌の読者欄や、そこでの投稿・投書によって、読者同士または読者と編集者との間のコミュニケーションがいかに行われていたかに焦点を当てた研究は蓄積されている。しかし、それは主に、『主婦之友』を分析した石田あゆ（1998）や、『少年世界』を分析とした田中卓也（2009）、『女学世界』を分析した嵯峨景子（2011）らによってなされている研究のように、婦人雑誌や少年雑誌、少女雑誌といった読者の属性、中でも予めジェンダーによって規定された読者層を想定している雑誌を対象としたものが中心となっていた。一方で、雑誌『明星』は、同時期に人気を博した『平凡』（平凡出版、1945年創刊）とともに、戦後日本を代表する「大衆娯楽雑誌」として、男女ともに、広く「若者たち」に読まれていた。阪本博志（2002, 2008）は、雑誌『平凡』に着目し、1950年代の『平凡』が戦後大衆文化の原型として機能し、その読者である働く若い男女の間に編集者も交えた連帯意識が形成されたと述べた。同時に、そこでは読者参加型のもと、編集者からの一方向のコミュニケーションのみならず、読者との双方向なコミュニケーションが生みだされていたことを明らかにしている。阪本の研究は、特に読者欄に焦点を絞ったものではないが、同じく「大衆娯楽雑誌」として括られる『明星』を探る上での手がかりとなり、「大衆娯楽雑誌」というメディアにおいてどのようなコミュニケーションが展開されてきたのかを歴史的に見つめるという点においても示唆的である。しかし同時に、阪本（2003）は、1970年代を一つの転換期として、『平凡』『明星』といった「大衆娯楽雑誌」が「アイドル誌」へと様変わりするとともに、『明星』の機能が増していくことについても触れている。しかし、阪本の研究はあくまで戦後大衆文化の原型としての『平凡』に議論の力点が置かれており、詳細な分析はなされていない。

雑誌『明星』を研究対象としたものは、橋本治（2002）が挙げられるが、橋本の研究は『明星』の創刊50周年を記念してその表紙の歴史の変遷を見ていくもので、誌面の分析は行われておらず、また、読者とのコミュニケーションにも焦点が当たっていない。

そこで、以上のような先行研究を手がかりにしつつ、これまでの研究の中で明らかにされていない部分を踏まえて、本稿では、『明星』の読者ページの分析を行っていく上

で1970年代という時期に着眼し、その時代の社会的な背景、具体的には、特に進学率の上昇と、「ヤング・マーケット論」の展開という二つの動向とあわせて、どのようなメディア空間が形成されたのかについても検討したい。

## 1-2. 『明星』とは

ここではまず、雑誌『明星』の概観について確認する。雑誌『明星』は先に記したように、1952（昭和27）年に、「夢と希望の娯楽雑誌」というキャッチフレーズで集英社から創刊された。それに先立ち刊行されていた当時の人気雑誌『平凡』の類似誌と見られる。雑誌『平凡』は終戦間もない1945（昭和20）年に平凡出版から創刊された文芸娯楽雑誌であったが、その後1948（昭和23）年に「歌と映画の娯楽雑誌」として編集方針を転換し、1950年代には、100万部を超える発行部数を記録し、「発行部数を超える男女の働く若者たちに全国規模で読まれていた」<sup>(2)</sup>。この人気を受けて『明星』は、



図1 『明星』(集英社)創刊号表紙

児童雑誌に定評のあった小学館を母体として1926（昭和1）年に創立し「趣味娯楽部門」に特化した役回りを担うという性格を有していた集英社<sup>(3)</sup>から創刊されることになった。図1は、『明星』創刊号の表紙であり、映画女優の津島恵子が表紙を飾っている。

創刊当初の『明星』は、主婦之友社で『主婦之友』を最大部数まで伸ばし“名編集長”として名を馳せた本郷保雄を編集長として迎えることで、本郷が婦人雑誌編集で培ったノウハウの取り込みが図られた。創刊直後にあたる1952年9月号の雑誌『新刊ニュース』では、「『明星』創刊！『集英社』座談会」と称した特集記事が掲載されている<sup>(4)</sup>が、それによれば、当時の集英社代表である陶山巖は、

「私のところはフリーな立場で、大人が読んで子供が読んで双方に面白い子供雑誌をつくりたい。内容は大人が読んで面白い題材をのせるようにしております。」<sup>(5)</sup>

と集英社の編集方針を語り、同時に創刊に向けて『明星』の方向性も同様であると述べている。また、本郷は、秦豊吉による帝国劇場の舞台に刺激を受け、「雑誌劇場という構想で、雑誌の編集をやろう」という構想を掲げ、

「秦先生の帝劇の舞台にヒントを得たので、雑誌平凡に刺戟されたわけではないのです。」<sup>(6)</sup>

と述べているが、両誌が“ライバル誌”になるであろうと認めている。加えて、「読者

対象は」という質問に関しては、

「十六才から二十才ですね。あまり高踏的なものは狙わず、ウエイトもどちらかというところ、やはり、若い女の人に重くなるでしょう。それに男の人も入ってくる。」<sup>(7)</sup>

と指摘している。

これらのことから、創刊当初の『明星』は、集英社という出版社が持つ元来の特性と、婦人雑誌編集で経験を積んだ編集長を交えることで異種混合を行い、読者層として児童や女性を特に意識しながらも、年齢層やジェンダー・バランスの振れ幅をある程度自由にして編集が行われていた片鱗が見えてくる。こうして『明星』は、阪本（2008）が指摘するように、1950年代において、『平凡』の躍進によって、見出された読者共同体としての10代後半の層をひとつの購買層の基盤とし、「戦後ひとつの世代として問題にされはじめたティーン・エイジャーの求める娯楽の代表的なものは、雑誌では、『平凡』『明星』であった。」<sup>(8)</sup>と言われるように、『平凡』とともに、娯楽雑誌を代表する存在になっていった。

## 2. 1970年代という時代背景と『明星』

### 2-1. 1970年代という時代背景

#### 2-1-(a) 「平準化された大衆社会」到来と若年層の動向

『明星』の創刊直後の1955年から1973年のオイルショック前までの高度経済成長期を経て、日本社会に「平準化された大衆社会」が到来したと阪本（2008）は、富永（1990）の論を引用しつつ指摘する<sup>(9)</sup>。「平準化された大衆社会」とは、「ブルーカラーとホワイトカラーの区別がほとんど消滅し、旧中間層が減少し、かくして国民の大多数が「新中間大衆」となって均質化し、伝統的なしきたりがもはや継承されなくなっているような社会構造と社会意識の状態」<sup>(10)</sup>であり、これにより、文化の境界が薄れるとともに、若者の間にあった労働者と教養主義の学生との間の差も曖昧になっていったと言われる。また、この時期、『明星』創刊後の1955（昭和30）年から1975（昭和50）年までの10年ごとの進学率という観点から紐解いてみると、以下表1、表2のような推

表1 高等学校進学率の推移

年代	男子	女子	全体
1955（昭和30）年	55.5%	47.4%	51.5%
1965（昭和40）年	71.7%	69.6%	70.7%
1975（昭和50）年	91.0%	93.0%	91.9%

表2 大学進学率の推移

年代	男子	女子	全体
1965（昭和40）年	42.0%	24.0%	25.4%
1975（昭和50）年	33.8%	34.6%	34.2%

（出典）『学校基本調査』

（出典）『学校基本調査』

移が見られた。

まず、「高等学校進学率」については、1975年に全体でも男女別に見てもともに90%を超えており、1965年から1975年の間にほとんどの若者が高等学校に進学するようになったことがわかる。次に、「大学進学率」<sup>(11)</sup>であるが、こちらも1970年代に入って上昇しているが、中でも女子の上昇が目覚ましく、男子を上回るものとなっている<sup>(12)</sup>。では、この時期の若者（児童／学生）はどのようなメディア、特に雑誌に接していたのかを続いて見ていくことにする。『読書世論調査』（毎日新聞社）では、読者層として学校に通う世代（小・中・高生）を対象にした「学校読書調査」が実施されている。それによれば、例えば、「中学生」についてで、

「今回の調査でめだつことは、「平凡」「明星」の愛読者がひじょうにふえているということ。2～3年生では男子30%、女子では40%～50%の者が買う・借りるのいずれかで手にしている。」（1973年度、p.143）

という記述がある。ここから、はじめに述べたような「大衆娯楽雑誌」の両翼を担う『平凡』『明星』がともにこの年代において親しまれていることが垣間見える。また、「小学生」についても、

「娯楽誌といえば、「平凡」「明星」などがすでに4年生あたりからかなり読まれるようになってきたこと（略）これは、それらの娯楽誌は歌手を中心とした若者たちのアイドルの紹介を大きな売りものにしているが、そのアイドルたちの年齢が、ここ数年しだいに若くなり、それが小学生たちにも多くの愛読者をつくる要因になっているのではないだろうか。」（1974年度、p.115）

「高校生」については、

「なかでも女子における「平凡」「明星」の読書率の高さはまさにピークといった感じである。」（1975年度、p.127）

といった記述があるように、時代を経るに従ってさらに若年層や女子の間で読まれる傾向になっていったことが見えてくる。これには、雑誌業界の間に「若者」や、例えば、『anan』（1970年創刊、平凡出版）や『non-no』（1971年創刊、集英社）という「女性」をマーケットとして新たに設定した雑誌作りが1970年代に広まっていたという事情が関係しており、その中心となっていたのが平凡出版や集英社であったと指摘されている<sup>(13)</sup>。

## 2-1-(b) 「ヤング」という概念とその市場化

また、この1970年代という時期には、特に「ヤング」ということを意識し、ターゲットとして念頭に置いた「ヤング・マーケット」ということが広告業界の中でも叫ばれ始めており、当時の雑誌、中でも広告専門誌である『ブレーン』（宣伝会議）においては定期的の特集が組まれていた。その中では、社会学者らが「ヤング」とはどういった存在であるのかについて論説を加えており、藤竹暁は、1971年6月増刊号の「ヤング・マーケット論 12章」という特集において、「現代のヤングの動向が現代文化の動向を大きく左右しつつある点については、見解の一致を見ることができる」<sup>(14)</sup>として『青少年の意識に関する世論調査』を引用しながら「ヤングの特性」についてまとめている。そこでは、「ヤング・マーケット」という時に想定されるのは、未婚、未就労の15歳から24歳までの者であると、アメリカのティーン・エイジ・カルチャーやK・ディビスの捉え方を参照しながら指摘する。また、「ヤング」とは、

「大人文化の受容、脚色、カリカチュアという側面がある。」

「大人文化を承認せず、新しい彼ら独自の文化をつくる」<sup>(15)</sup>

という二つの顔を有するとしながら、特に、現代（当時の）「ヤング」の特徴として、友人らの意見に影響されやすく、水平的なネットワークの形成を行う傾向にあると述べている。同特集では、「ヤング」の特性として「家庭における親子の断絶」も指摘されている<sup>(16)</sup>。また、1980年4月号でも「ヤングへのアプローチ」と題した同様の特集が組まれており、そこでは1970年代の「ヤング」とはどういった存在だったのかが他の時代との比較の中で分析されているが、それによると、

「70年代～80年代前半のヤングは、管理社会のルールに適應すべく、幼児期から条件づけられている（もちろん「落ちこぼれ」層も存在するが、ヤング世代のヒーローは、しばしばこの層から出現する。）彼らの場合は、ある範囲まで、ホンネがタテマエに一致している。むしろ、タテマエ的なルールがないと不安を感じる。」<sup>(17)</sup>

と分析されている。これらのことから、1970年代は、「ヤング」という特性を有する世代間の水平的な繋がりを意識したマーケットが構築される土壌があったことがわかる。では、こういった「ヤング」世代に向けて『平凡』や『明星』の誌面がどのように展開されていたのかについては、先述の「学校読書調査」には、

「中・高校生たちにとっての新しい若いアイドルが登場し、両誌がそれらの人気歌手にスポットをあてて編集し、受験勉強に疲れた若い心をつかんだということあげる事ができる」(1973年度, p.144)

という指摘があり、また、中でも特に、阪本（2008）は、1970年代当時の『明星』の編集長であった鈴木力へのインタビューを引用し、「『明星』の方が、アイドルに現れた日本社会の平準化をより捉えていた」<sup>(18)</sup>と『明星』について特筆している。それに加えて、当時の『明星』では、「ハローヤング」（詳しくは後述）というような読者ページも存在しており、次節では、この時期（1970年代）の『明星』に焦点を当てることにする。

## 2-2. 『明星』の転換期としての1970年代

1-2では、創刊当初、1950年代までにおける『明星』について概観し、さらに、前節では、1970年代においては、若者の平準化と進学率の上昇と相まって『明星』という雑誌が若者、特に学生の間で広く読まれており、そういった「ヤング」に向けた市場化も計られていたと述べたが、ここでは、そうした時代背景での『明星』に着目する。まず、この時代は、『明星』の最盛期であると考えられる<sup>(19)</sup>。それは、1972（昭和47）年に発行部数が100万部を突破し、以後も1973（昭和48）年には170万部、1979（昭和54年）には175万部<sup>(20)</sup>と、雑誌の売り上げの面から言えることである。同時に、編集者や関係者も1970年代を『明星』の「黄金の時代」と位置づけている<sup>(21)</sup>。1971年に集英社に入社して以来30年に渡って『明星』の編集に携わってきた金谷幹夫は、

「私は71年に入社して『明星』に配属されたんですが、その年の9月から表紙が劇的に変わったんです。その号から篠山紀信さんが撮っていらっしゃいます。ですから顔を寄せた笑顔の男女をアップで撮るといって『明星』パターンを確立されたのは、篠山紀信さんなんです」<sup>(22)</sup>

と述べており、1971（昭和46）年9月号から1981（昭和56）年9月号までの10年間において、表紙に写真家の篠山紀信を起用していたこと<sup>(23)</sup>が、この時代の『明星』が転換期に差しかかっていたことを端的に示すものである<sup>(24)</sup>。また、篠山自身も、

「僕が撮影していた七〇年代というのは圧倒的に「黄金の十年」でした。」<sup>(25)</sup>

と当時の様子を回想する。同時に、雑誌の内容面でも変化が見られる。金谷は、

「この頃から、編集部にも自分たちのアイドルを見つけたいという意識が芽生えてきました。そうしているうちに、南沙織、小柳ルミ子、天地真理が出てきて、野口五郎、郷ひろみ、西條秀樹が出てくるわけです。（略）当時は時代がアイドルを生みだしていたんですね。」<sup>(26)</sup>

と振り返り、阪本（2008）は、当時の『明星』の編集者である鈴木力の言葉を引用し、「等身大のスターっていうところにかなり『明星』の方が固執していた」<sup>(27)</sup>と指摘している。これらは、稲増（1989）が「アイドル」に関する先行研究の中で指摘するように、1950年代終盤から1960年代前半にかけて映画からテレビへとメディアの移行がなされる中で、メディアの中で活躍する者も、見（観）る側にとって、手の届かないような神格化された「スター」から、隣人やクラスメイトのような親しみのある「アイドル」へと変化を遂げ、時を同じくして『スター誕生』（1971年10月～日本テレビ系列）といったテレビメディア・コンテンツも開始され、意図的にテレビから「アイドル」が生みだされ始めた、という時代性を捉え、『明星』の編集にも変化が見られていたことをうかがわせる。また、現在の『Myojō』の編集長である安藤は、この時期の『明星』について、

「その時代（1970年代）はね、スターになった人たちの家が貧乏だったりとか、そういうのを抱えて、自分が親を楽にしてやるんだ、家建ててやるんだってってスターになった人が多かったんですよ。だからその辺が非常にわかりやすい関係だったんですよ。だから読者たちの憧れである、だから今でも、中南米の貧しい子たちが野球やって、で、メジャーリーグのスターが自分の国から出たスーパースターがいてその人たちになりたい、で、その人たちももとは貧乏だったって非常に分かりやすい図式が70年代の日本の芸能界にもあったわけですよ。」<sup>(28)</sup>

と振り返り、当時の「スター」が読者の「憧れ」であるとともに、経済的な部分も含めて読者にとっても「近い」存在であったと語っている。

次に、ここで実際の『明星』に目を向けてみよう。

表3、4はそれぞれ、『明星』表紙における登場人物の男女比、職業比をそれぞれコード化したもの<sup>(29)</sup>であるが、これによると、創刊当初はほぼ女性、中でも映画女優中心であったものが、1970年代までに男女比はおおよそ半々（男性の方が多くなってきている）、歌手の割合が増えてきていることが見えてくる。なお、これは『明星』の表紙

表3 『明星』表紙の男女比  
単位：％（人）

期間	男性	女性	全体
1952年～1959年	6.0% (2)	94.0% (32)	100.0% (n=34)
1960年～1969年	52.4% (54)	47.5% (49)	100.0% (n=103)
1970年～1979年	58.8% (60)	41.1% (42)	100.0% (n=102)

表4 『明星』表紙の職業比  
単位：％（人）

期間	俳優	歌手	歌手兼俳優	その他	全体
1952年～1959年	88.2% (30)	2.9% (1)	8.8% (3)	0% (0)	100.0% (n=34)
1960年～1969年	18.4% (19)	50.4% (52)	30.0% (31)	0.9% (1)	100.0% (n=103)
1970年～1979年	8.8% (9)	68.6% (70)	20.5% (21)	2.9% (3)	100.0% (n=102)



にのみ着目した結果であり、一概に誌面全体の特徴とはいえないが、先述の「学校読書調査」でも触れられていたように、1970年代に至る間に、テレビメディアから男女の歌手が登場し、娯楽誌を賑わせていたという一つの傾向があったと捉えることはできるだろう<sup>(30)</sup>。さらに、『明星』というヤング層に向けての雑誌進出とその人気により、集英社自身が1970年代に「雑誌王国」として君臨するに至ったということも指摘されている<sup>(31)</sup>。

以上のことから、若い世代に向けて、同世代の等身大の姿を描き出そうとした1970年代の『明星』は、雑誌自体の「黄金の時代」であったことはもちろん、集英社自体の躍進にも影響を与えたと見ることができ、この1970年代の『明星』を対象とし、そこで読者とのコミュニケーションがどのように展開されていたのかを探ることは意義深いことであると考えられる。

### 3. 読者ページについて

#### 3-1. 『明星』の読者ページの変遷

ここからは、1970年代の『明星』の読者ページ、中でも「ハローキャンパス」という読者ページを分析していくにあたり、まず、雑誌『明星』に現れた読者ページの変遷について記しておきたい。

『明星』における読者ページとしてはじめに挙げられるのは、「明星友の会」（以下「友の会」）のページである。この「友の会」は、創刊号である1952年10月号から設けられた『明星』愛読者同士の交流コーナーであり、阪本（2008）は、これも当時人気を博していた『平凡』における「平凡友の会」を意識してのことであると指摘する。創刊号には、この「友の会」新設の記載がある。それによれば、

「創刊を記念して、明星「友の会」をつくりました。この欄はみなさん方、明星愛読者だけで作っていただくページです。どしどし、お国じまんや、お国の風俗習慣、または読者同志の意見を交換しあって「友の会」を通じて一人でも多くの方がお友達になってください。」  
（『明星』1952年10月号 p.247）

とあり、読者同士で作りに上げていくページであることが強調されている。阪本（2008）は、「平凡友の会」の最盛期は1950年代後半であり、1960年代前半には衰退期に入り、ページ自体が姿を消しており、その模倣からはじまった「友の会」もこれに連動していると述べている。この指摘の通り、「友の会」は1964年を境に誌面から姿を消し、代わって読者ページ「愛読者ルーム」となっていた<sup>(32)</sup>。本稿の目的はあくまで1970年代の読者ページの分析であるため、ここでは、これらの詳細な分析は誌幅の関係で別の機会

に譲るが、二つのページを比較すると、「友の会」が、「私たちの編集室」「私たちの記録」と明記され、読者主体でありかつその具体的な交流内容やイベントを紹介するページとなっているのに対して、「愛読者ルーム」は、「働く仲間」「明星応援団」「クラス仲間」「みんなの作品」というように、項目ごとに読者から寄せられた投書や作品を掲載・紹介するに留まっている。また、「友の会」においては、住所や氏名を明記することが求められていたが、「愛読者ルーム」においては、M子、Y子のようにペンネームが目立ち始めていた。これら二つの読書ページを経て、1969（昭和44）年2月号には、「ハローヤング」という読者ページが新設され、続いて1972（昭和47）年3月号からは「ハロージョッキー」、1976（昭和51）年11月号からは「ハローキャンパス」と名称や形態を変えているのだが、これら1970年代の読者ページについては次節にて詳述する。

### 3-2. 1970年代の読者ページ

前節で述べてきたように、『明星』読者ページは、創刊から様相を変化させているのだが、ここでは特に本稿の分析対象として提示している1970年代の読者ページについて述べる。

まず、1969年に新設された「ハローヤング」は、「若いあなたが作るページ」と掲げられ、主に、「ヤング」という言葉を冠し、読者である「ヤング」から寄せられた意見や作品を「みんなの意見」「みんなの作品」として掲載・紹介しており、これは1960年代における「愛読者ルーム」と地続きであると思われることができる。そこでは、読者同士の交流や「スター」と読者との交流、または編集者と読者との交流といったものよりも、読者それぞれの意見や投書自体に重きが置かれ、それぞれが無機的に掲載される傾向にあった。しかし、1970年代に入ると、読者から寄せられた詩や替え歌といった作品を載せる「創作」コーナーの他に、読者から寄せられた意見に対して、編集者が問題を提起し、同じ題材についての意見を一様に掲載する「広場」というコーナーが設けられ、読者の意見・投書が有機的に結びつきながらそれが読者同士の交流延いては編集者との交流へと繋がっていった。その一例を紹介する。1970（昭和45）年6月号の「広場」では、

「最近、この『ハローヤング』に、ピーターのすばらしさをたたえる手紙と、ピーターをぶっとばせ!という、まったく正反対の手紙が、わんさかわんさか集まっています。(略)きみもぜひ意見を聞かせてください《編集部》」（『明星』1970年6月号 p.204）

という問題提起のもと、読者から寄せられた「ピーター」についての意見が掲載されている<sup>(33)</sup>。また、これを受けて、次号である7月号では、同様の「広場」で、「ピーター論争」と題して、

「先月号で取り上げた“男か女かピーターか”は反響を呼び、全国から多くの手紙が編集部  
に寄せられました。今月は、この中の一部を取り上げてみました。あなたの意見もぜひきか  
せてください《編集部》」（『明星』1970年7月号 p.198）

と記され、再び読者からの意見によって議論が展開されている。こういった議論の題材  
は、上記のようなテレビで活躍する「スター」に関するものに留まらず、徐々に若者が  
抱える身近な問題へも広がりを見せ、それとともに、新設当初は2頁足らずであった  
「ハローヤング」は1970年8月号では6頁へと拡大されていた。しかし、1972年3月  
号からは新たに、スターと読者との交流を主眼とする「スターときみとが友だちになる  
ページ」である「ハロージョッキー」というページも作られ、しばらくは両ページが誌  
面で共存するのだが、その年の10月号からは、「ハロージョッキー」のみで「ハローヤ  
ング」が廃止され、また、1973（昭和48）10月号からは「あなたの声がかどます  
ハロージョッキー」となったものの、「スター」と読者との交流、中でも、読者から寄  
せられた「スター」に関する質問を紹介し、編集者がそれに回答する「Q&A」コー  
ナーを軸とするようになり、読者同士の交流や議論の場としての側面は一旦薄れていく  
ことになる。しかし同時に、読者と編集者との交流の場として新たに「編集者&スター&  
あなた おしゃべりプラザ」と冠したコーナーが設置され、それまで《編集部》という  
表記で集合体にしか過ぎなかった編集者が、「明星アニキ」という呼称のもとに人格化  
し始めるようになった。この過程の中で読者ページは頁数としても毎号10頁近く割か  
れ、次第に誌面においても比重が増していくことになる。そして読者同士、読者と「ス  
ター」、読者と編集者という様々な形態での交流の場として読者ページが結実するの  
が次に設置される「ハローキャンパス」である。

### 3-3. 「ハローキャンパス」とは

では、「ハローキャンパス」とはどのような読者ページであったのか。「ハローキャン  
パス」とは、先述のように1976年11月号からスタートした読者ページである。同号で  
は、「読者のみなさんがドーンと登場する超ワイド・ページです」と紹介されており、  
「ハローキャンパス大募集！」として、

「若者のフィーリングにぴったりのページにしようと思星アニキたち、ない知恵しほって大  
フントー！どう？おもしろかったかな？新しいコーナーも増やしたいので、キミの便りが頼  
みのツナ。待ってるよう！」（『明星』1976年11月号 p.197）

と新設ページの宣伝がある。キャンパス」という名称からも連想できるように、特に学  
校へ通う世代の若者読者に向けて呼びかけられていたことがうかがえる。また、「あな

た↔編集部↔スター」という文字が示すように、読者・編集者・「スター」双方向のコミュニケーションを意図したページである。この「ハローキャンパス」では、1980（昭和55）年に廃止されるまで様々なコーナーが生まれ、前コーナーの「ハロージョッキー」同様に頁数も10頁～20頁と多いのだが、それらは、「あなた↔編集部↔スター」という趣旨を汲むように、読者と「スター」の交流コーナー、読者と読者が編集者を介在させながら交流するコーナーなど、読者が『明星』という雑誌に参加し、何らかの交流を行い、そうすることで読者自身が雑誌における主体となることが可能となるページとなっている。そこで、次章では、1970年代の中でも特に、読者主体の双方向でのコミュニケーションが展開されていた「ハローキャンパス」に着目し、コミュニケーション形態別に分類しながら、そこでどのような言説が展開されていたのかの分析を行っていくことにする。

## 4. 「ハローキャンパス」の分析とその考察

### 4-1. 「ハローキャンパス」の設置コーナーとその分類

本章では、『明星』読者ページ「ハローキャンパス」の詳細な分析にあたり、まずそのページにおける設置コーナーをコミュニケーションの形態ごとに分類を試みる。

「ハローキャンパス」内の各コーナーは、①読者からの投稿に「スター／アイドル」<sup>(34)</sup>が返答する②読者からの投稿に編集者（専門家も含む）や読者が返答する③読者からの投稿（作品）を掲載するのみ、というコミュニケーションの形態別に3つのタイプに分けられた。その結果は以下表5のようになる<sup>(35)</sup>。

表5 「ハローキャンパス」内のコーナーの分類

コミュニケーション形態の種類	コーナー名（掲載号）
①読者からの投稿に「スター／アイドル」が返答する	スターにアタック！！（76年11月号～77年5月号）今月のおじゃまむし（76年11月号～78年11月号）KYORO・KYORO マフィア（77年6月号～79年3月号）青春会議（77年10月号～78年2月号）スター DJ パック（78年12月号～79年11月号）
②読者からの投稿に編集者（専門家も含む）や読者が返答する	ヤング・ヤング・ボイス（76年11月号～80年1月号）あなたとアニキのおしゃべりプラザ（76年11月号～77年5月号）Reader's Questions 読者のなんでも相談室（77年8月号～78年4月号）全国ティーンズなんでも相談室（78年5月号～）芸能なんでも相談室（79年5月号～）THE VOICE（80年2月号～）
③読者からの投稿（作品）を掲載するのみ	そっくりショー（似顔絵コーナー）（76年11月号～）ペンパル&掲示板（ハロ・キャン掲示板）（76年11月号～）明星ワンダーランド（77年2月号～）派閥抗争！（77年4月号～78年5月号）ミス&ミスターキャンパス（？～78年4月号）SUPER ティーンズ（78年5月号～）FC（ファン・クラブ）インフォメーション（78年11月号～）ラブアタック伝言板（78年12月号～）

この表を見ていくと、コーナー名に「青春」「ヤング」「ティーンズ」と若者世代を意識した名称が冠せられるとともに、「キャンパス」という名が示している通り、「学校」を連想させる作りになることで、学校に通う年代を想定していることがわかる。それは先に記したように、この時期に高等学校、大学ともに「進学率が上昇していた」という社会的な背景を捉えていると想像できる。以下においては、この中でもコミュニケーション形態の①②をそれぞれ①読者-「スター／アイドル」交流型②読者-編集者／読者交流型として、特に誌上で読者とのコミュニケーションを含めるコーナーであると判断し、分析を加えることにした。

#### 4-2. 読者-「スター／アイドル」交流型におけるコミュニケーションとその機能

まず、①読者-「スター／アイドル」交流型についてであるが、このタイプの交流は、読者のもとを「スター／アイドル」が訪れるものや、読者と「スター／アイドル」が「座談会」と称してディスカッションを行うといった「直接的な交流」と、読者から寄せられた意見や質問に対して「スター／アイドル」が誌面の中で回答する「間接的な交流」の二つに分けられる。

##### 4-2-(a) 直接的な交流

「直接的な交流」についての代表的なものとしては、「今月のおじゃまむし」と、「青春会議」というコーナーが挙げられる。中でも、「今月のおじゃまむし」は、全国津々浦々の読者の自宅を「スター／アイドル」が訪問するというもので、これは、「ハローキャンパス」が新設された1976年11月号からおおよそ2年間に渡って連載された。ここでは、例えば、

「今月のおじゃまむし①=山口百恵が宮崎県の矢野さんちへ”こんにちは”名物”雲海”にみんなゴールド気分!!!」(1977年9月号 pp.220-221)

「家庭教師をしている大学生の私。百恵ちゃんの大ファンだけど、私の教えてる女の子もやっぱり大大ファンなのです。しかし、その子ったら百恵ちゃんに会わせてくれなきゃ勉強しないワと抵抗!」(略)必死の便りに、百恵も心を動かされて決定! (略)「裕子ちゃん、あなた勉強しないってお姉さんを困らせているの?ダメじゃない。これからはウンと勉強するんですヨ」と百恵。裕子ちゃん、素直に「ハイ。もう百恵ちゃんに会えたんだもん、私、がんばっちゃう。」(同上)

という具合に、読者を訪問した「スター／アイドル」との交流が、その時の集合写真を交えながら紹介されている。また、「青春会議」は、例えば、

「No.1 尾崎亜美 執行猶予中の高校時代にいちばん好きなことをやっておこう!!!」(77年10月号 pp.214-215)

といったように、毎号違う「スター／アイドル」が登場し、読者数名と学校生活について、また、恋愛についてなど、同世代ならではの共通の悩みについて議論を交えることで、親睦を深めていくというコーナーになっていた。以上のコーナーにおいては、読者が「スター／アイドル」と直接的な交流を行う中で、両者が問題を共有するとともに、人生の先輩として「スター／アイドル」が読者に向けてちょっとした助言をすることにより指南役となっていた。

#### 4-2-(b) 間接的な交流

次に、「間接的な交流」における代表的なコーナーとして挙げられるのが、「スターDJパック」である。このコーナーも毎号違う「スター／アイドル」が登場し、登場する「スター／アイドル」に寄せられた質問が書かれた直筆の原稿用紙やハガキが掲載され、「スター／アイドル」がそれに回答するという形をとっていた。どのような質問が寄せられたのかについては、例えば、「血液型」や「好きなタイプ」という単純な質問から、

「郁恵ちゃんは、ドラマに出ても、いつも三枚目。たまには、二枚目のステキな役をやって欲しいのです。そうすれば、また違う郁恵ちゃんも見られるし・・・」(広島市・相原正彦)  
(1979年2月号 p.240)

という意見・要望が読者から寄せられ、

「ホントの私も三枚目だから、多いんでしょうね、きっと。私だって、不治の病気にかかって、愛する人の胸で死ぬ、なんて役やりたいですけど、いまは、いただいた役を全力でつくして演じていくことが、私にいちばん必要だと思うんです。」(同号 パーソナリティ：榊原郁恵)

というように本人が返答するというものや、中には

「私、いま中3。進学のこと悩んでいます。なぜ高校に行くのか、自分でもよくわからなくなって・・・。みんなが行くから何んとなくって感じなんです。ひろみさんは中3のとき、高校受験をどう考えていましたか？」(和歌山県日高郡・マミ)(1979年1月号 p.233)

のように、読者から身の上相談が投げかけられることもあり、それに対して、

「中3ぐらいじゃ、ずっと先のことを考えて、自分の進路を決めるって、かなりムズかしいよね。みんな何となく決めてるんじゃないかな。それより、大事なのは、選んだ道で、一生懸命やることじゃないかな。」(同号 パーソナリティ：郷ひろみ)

と、「スター／アイドル」が読者の悩み解消のために読者の悩みに自分を重ね合わせて回答を寄せている。

以上のように、読者－「スター／アイドル」交流型におけるコミュニケーションを通して、読者側は、「スター／アイドル」にメディア上で付与されたイメージに対して真相を確認したり、異議申し立てを行ったりしていたが、同時に「スター／アイドル」の側もそれに対して同意することにより自らに付与されたイメージの増幅をはかったり、時には反論を行っていた。また、上記のように、同じ問題を共有できる場所としてコーナーが機能していた。

#### 4-3. 読者－編集者／読者交流型のコミュニケーションとその機能

次に、②読者－編集者／読者交流型についてであるが、このタイプのコーナーの代表例となるのが、1976年の「ハローキャンパス」新設当初から1980年1月号までという長期間に渡って連載された「ヤング・ヤング・ボイス」である。なお、1980年2月号からは名称が「VOICE」となるものの、内容に関しては「ヤング・ヤング・ボイス」からの大きな変更が見られず、そのことを考慮すると「ハローキャンパス」において終始展開されていたコーナーであることから、このコーナーが読者にとって、また読者ページにとって、意義深いとともに、重要な交流空間であったことが推測できる。では、このコーナーにおいて、どのような言説が繰り広げられていたのかに着目してみる。まず、このコーナーは、

「おお、なんとシビアなおことば！見事にヤングのハートに訴えるネ。ヤング・ヤング・ボイスはヤングの論争の場。キミたちのナマの声をぶっつけよう。キミの意見が、もしかしたら世の中を変えるかもしれないゾ！」(1977年7月号)

「ヤングにはヤングの意見があるはず。」(77年11月号)

「ヤングのことをわかってくれるのは、やっぱりヤング。言いたいことをぶつける相手のいないキミ、このコーナーの仲間になろうよ！」(78年3月号)

「ここはヤングの解放区。思ってることを素直に出せるっていう特権を利用しない手はないのだ。全国にいる仲間に向かって、大声で叫んでみようよ。きっとたくさんのこだまが返ってくるぞ。」(79年3月号)

と紹介文が交えてあり、読者として想定される世代である「ヤングによるヤングのための場所」であり「ヤング＝仲間」という言説が展開され、「ヤング」が抱える悩みや問題が吐露され、それに対する編集者を含めた読者同士での議論が巻き起こっている。連載当初は、読者の投稿が掲載されるのみという側面が強かったのだが、回を重ねるに従って、読者側から寄せられる意見に対して、他の読者が返答し、さらに誌面上で議論が展開されていくという様相を呈するように変化していく。では、具体的にはどのような

意見があったのかについては、大きく (a) 「スター／アイドル」はどうあるべきかについて (b) ファンの在り方について (c) 「ヤング」が抱える問題についてという三つに分けられた。そこで、それぞれについて具体例を見ていく。

#### 4-3-(a) 「スター／アイドル」はどうあるべきかについて

まず、「スター／アイドル」はどうあるべきかについては、例えば、

「スターは特別な人間じゃない！」(和歌山県・角川浩子)(78年2月号 p.215)

という意見があるが、その中では、

「彼らだって、スターになる前は、ごくふつうの男のコ、女のコだったんだから、そんなに遠い存在じゃないはず。それを特別な目で見たら向こうも嫌がるでしょう。キャンディーズの「普通の女のコに戻りたい」という発言だって、もしかしたらこの辺りに原因のひとつがあるかも……。もっと友達のような雰囲気、スターを応援しなきゃいけないんじゃないかな？」(同上)

というような「スター」に対する見解が寄せられている。また、

「甘ったれるな●キャンディーズ」(京都市下京区・岩神光一)(78年5月号 p.211)

と題して、

「『普通の女の子』に戻りたいなんていう、あいまいな理由でやめちゃうなんて、無責任だし、甘えているとしか思えない。」(同上)

という当時解散を発表したキャンディーズに対する意見が寄せられ、

「ファンに対する裏切り行為だ。」(同上)

という辛辣な心境が述べられていた。このように、「スター／アイドル」とはどうあるべきかについて、ファンである読者の側からの意見が寄せられていた。また、そういった意見に対して、

「これは、スターを見るときだけじゃなくって、キミらのまわりにいる人も同じ。偏見はヤングから自由を奪うのさっ！」(『明星アニキ』)(78年2月号 p.215)

と、編集者(『明星アニキ』)が返答したり、また、



「あまったれるなキャンディーズ」大反響！5月号のこのコーナーに載った京都の岩上クンの「ファンにナイショで、やめるときを決めて芸能活動をするなんて、甘ったれてるよ」という意見に、賛否両論のハガキが、アニキに殺到しているよ。ほとんどは「彼女たちの気持を理解してあげてこそファン。さみしいけど、3人の発展的解散を喜んであげなきゃ」というものだが、岩上クんに賛成している人もけっこう多いのだ。自分の好きなスターが突然引退宣言をしたら、さてキミは、どちらの考え方をするだろう？」(78年7月号 p.239)

と編集者（『明星アニキ』）が寄せられた意見を基に問題提起を行い、

「甘ったれるなキャンディーズ」に大賛成！あまりにも、自分勝手よね。口では「スタッフのみなさんには、申しわけなく思っています」なんて言ってるけど、「普通の女のこにもどりたいたい」なんて理由だけでは、私は納得できないんだなあ。無責任だと思うわよ！」(千葉県夷隅郡・K子) (同上)

といったようにもともと意見に同意するものや、

「オレは激怒しているのだ。キャンディーズに対して、こんな見方をしているやつがいるなんて、信じられない。彼女たちは5年間も自分の青春を投げ出してボクらを楽しませてくれたのに。ファンなら、彼女たちの新しい門出を祝うのがあたりまえだと思うんだ。」(兵庫・阪本征二) (同上)

というように、意見に対して反論を述べているもの双方が掲載されており、誌上での議論が展開されている。ここでは、ただ「スター／アイドル」とはどうあるべきかに留まらず、「自分たち＝ファン」はどうあるべきかの議論にまで発展していることがうかがえる<sup>(36)</sup>。

#### 4-3-(b) ファンの在り方について

次に、ファンの在り方については、例えば、

「FCに入っていないくたってホントのファンはいるのよ！」(群馬県高崎市・多胡佳子) (78年2月号 p.214)

という意見が挙げられるが、そこでは、

「私はキャンディーズの大ファンです！（略）でも事情があって、ファンクラブに入ってないし、コンサートにも行けないんです。そうしたらクラスの女のこに「ファンクラブにも入ってなくて、コンサートにも行かないんじゃない、ホントのファンじゃない」って言われてすごくショック！（略）スターは、ファンクラブに入っている人のものばかりではないはず。」(同上)

というように、「本当のファン」とは何なのかについての問題提起がなされている。それを受けて、「「ほんとうのファンってナンダ？」2月号の多胡佳子さんに共感のハガキ続々！！」と題したコーナーが設けられ、そこでは、

「2月号の多胡さんの意見に大賛成。私は小6なんで、FCに入るのを両親から禁止されているし、コンサートも行ったことがないんです。それでクラスの男のこに「ファンのくせにFCに入っていないなんて、ニセモノやぞ！」って言われて……。私みたいに幼いファンでも、目立たないファンでも、キャンディーズを応援する気持は同じだと思うんです。」(大阪府吹田市・山田さかえ)(78年4月号 p.200)

「ぼくは、ピンクレディーのファン。でも、わけあってFCに入っていない。だけど友達をファンだと認めてくれている。FCに入ったり、コンサートに行くのもひとつの方法だけど、カゲで一生懸命応援しているファンだって、せいっぱいガンバってるのっ！」(北海道札幌市・Y・K)(同上)

という投書が掲載され、様々な環境下にながらも「ファンである」という共通項により問題の共有や共感がはかられている。

#### 4-3-(c) 「ヤング」が抱える問題について

次に、「ヤング」が抱える問題についてであるが、この項目については、様々な問題が挙げられ、例えば、受験についてや校則について、また、大人への不満などがこれにあたるが、そのほとんどが「ヤング」が属する社会、すなわち、「学校」の中で生じた問題に対する投書であった。具体例を挙げると、まず、受験については、「クタバレ！受験産業」と題した投書が掲載されているが、その中では、

「どうも、受験生を食いものにしてる会社が多すぎるんじゃないか。(略)まわりの大人たちも、不安になってそれをすすめる。(略)なあ、みんな。どんな宣伝があろうと、どんなに大人たちに言われようと、ぼくらはもっとしっかりした自分なりの考えと目的を持つべきなんじゃないだろうか？」(大阪府枚方市・谷木洋一)(79年4月号 p.231)

と受験問題を通しての大人たちへの不満が述べられている。それに対して、

「そのとおり。人に言われたことで、スグに動揺するのは、よくない。金を使うも使わぬも、しっかり自分で決めよう！」(明星アニキ)(同上)

というような編集者(「明星アニキ」)側からのコメントが付与されていた。次に、校則については、例えば、「先生、もちもの検査は人権の侵害よ！」と題した投書が掲載され、

「聞いて下さいませ、私たちの学校のムゴさを。先週の土曜日に全校生徒を体操着に着がえさせ運動場に集め、先生たちが各教室をまわって、机やカバンの中、制服のポケットをすべて調べたんですよ。(略) だいいち、女生徒のカバンを男の先生が平気であける無神経さには、怒りを通り越して、あきれちゃうわ。(略) もっと私たちの気持ちも理解して欲しいのよねえ。」(三重県多気郡・A美) (79年8月号 p.231)

という「学校／先生」に対する思いの丈がぶつけられている。またそれに対して、

「校則を厳しくしても、人の心はしばれないもの。それにしてもヒドイ学校だなァ」(明星アニキ) (同上)

というような編集者(「明星アニキ」)からの合の手が加えられる。また、これらは、扱われる話題はそれぞれ異なっているものの、自分たち「ヤング」の社会からの学校、先生といった大人に対する異議申し立てであるが、学校を挟まずに直接大人(親など)に向けられたものもあり、例えば、「大人たちよ! 「近頃の若者は」はもう言わないで!」と題して投書が掲載され、

「うちの両親は、ちょっと失敗すると「近頃の若者は・・・」って、すぐ言うの。この言葉、私、大キライッ!」(東京都調布市・中山富美子) (79年1月号 pp.231)

というように、大人、中でも親に対する反発の声が寄せられ、それに対して、

「お互いに、一方的に要求するんじゃなく、理解する姿勢を持つことは、大切だよね。」(明星アニキ) (同上)

と編集者(「明星アニキ」)が意見に同調している。また、ただ不満が述べられるだけでなく、「ヤング」のそういった傾向について苦言を呈する投書もあり、例えば、「大人に文句を言うためにも、もういちどマナーを考えよう」と題した投書が掲載されており、その中では、

「最近このコーナーで、大人への批判をよく見ます。そして、その意見はどれも正しいし、私も賛成。でも、(略) 私たちは若いし、何をやってもいいと思うの。ただ、そこには、他人に迷惑をかけちゃいけないっていうルールはあるはずでしょう? 人を批判することは大切なこと。でも、私たちがマナーを守らず、やることもやらないで大人を批判したって、けっしてわかってもらえないと思うの。大人たちに逆襲されないためにも、まず自分たちのやるべきことをやって、それから大いに大人たちに文句を言いましょよ、ねえ。」(埼玉県北葛飾郡・Y子) (79年4月号 p.230)

という自己（「ヤング」）を見つめ直すことで相対化しようと試みる意見も存在していた。それに対して、また編集者（「明星アニキ」）により、

「大賛成。やることもやらずに、批判だけする人の言葉は、相手の胸を、ちっともうたないものだからね。」（明星アニキ）（同上）

という論しながされていた。また、「大人たちはどうして“SEX”を隠したがるのかしら？」（東京都中野区・M子）（79年8月号 p.230）という投書や、さだまさしが1979年に発売した『関白宣言』の歌詞の内容を問題視する意見が寄せられるというように、特に女性の側から既存のジェンダー秩序に対する異議申し立ても行われていた。このような傾向は、第2章で述べたように、この時期の『明星』の読者が女子学生の間で多く読まれていたことから、女性の側が社会（大人）に社会の中でのジェンダー規範や役割に疑問を投げかけることで、男女というジェンダーを超えて議論を展開する契機となっていたと捉えることができる。同時に、当時のジェンダー状況を鑑みてみると、1960年代後半に欧米に端を発した「ウーマン・リブ（女性解放運動）」が沈静化し、再び女性の主婦化が進行する等、ある種ジェンダー・バックラッシュが巻き起こっていた時期であり、そうした中で、若者間で、ジェンダー問題の議論が行われていたという事実は見過ごすことができまい<sup>(37)</sup>。

このように、「ヤング」が抱える問題を投書という形で提示し、それが誌面に掲載されることにより「ヤング」の間で共有し、大人社会に対する不満として表出させたり、議論を加えたりしていくことにより、「ヤング」=仲間であるという共同体の形成がなされていたと見ることができる。そして、その共同体は、「私たち（ヤング）VS 大人社会（先生／親）」という対抗図式を担保に形成されていた。また、そこに一役買っていたのが編集者、すなわち「明星アニキ」という存在である。

#### 4-4. 「明星アニキ」の存在とその機能

「明星アニキ」は、編集者の総体のことであり、先述の通り、1973年の10月号より、読者ページに登場するようになったのだが、「ヤング・ヤング・ボイス」が「明星アニキ責任編集」となっており、「ハローキャンパス」新設に伴って誌面での役割も増していく存在であった。特に、1978年2月号から5月号では、「ハローキャンパス」内に「明星アニキ図鑑」というコーナーが設けられ、図2のように実際の編集者を紹介しており、個人としての人格を有するものへと押し上げられていっている。

また、今まで分析してきたように、「明星アニキ」は、「ヤング・ヤング・ボイス」の中で特に出現しており、そこでの「明星アニキ」はこれまで見てきたように、読者であ

る「ヤング」から寄せられた意見に対して、共感したり、時には、厳しく論じたりしながら話の聞き役として、または、議論の場の進行役として機能していた。また、「キミは、どう思う？」という形で読者＝「ヤング」に、問題に対する自分なりの見解を求める役回りでもあった。今までの例の中では、あくまで読者から寄せられたある投書の中での意見に対して、「明星アニキ」が問題提起を行っていくという形であったが、この他に、「明星アニキ」本人が問題提起の発起人となる場合もあり、これは、例えば、「明星アニキからの問題提起 ペンパルについてキミはどう思うか」と題して、

「このところ、雑誌のペンパルコーナーを通して知り合った女性を暴行、脅迫、悪質きわまりないのでは殺してしまったという事件が続いて起きた。(略) 明星アニキはスッゴク残念でならない。友人のいないさびしい思いをしているひと、或いは遠く離れたひとと趣味について、青春について語り合いたいというマジメなヤングたちに限られたページの中でペンパルコーナーを提供してきたのだ。不マジメな連中はモチロンごく少数だろう。しかし、アニキは考える。この少数の連中のために多くの良きペンパルフレンドたちが特殊な目で見られ気まずい思いをすることにもなる。マジメな文通だから平気というひともあるだろう。でも、アニキはペンパルコーナーを中止しようかと思う。キミの意見を教えてほしい。」(明星アニキ) (77年10月号 p.221)

というものが挙げられる。これらの交流により、この例のように、「明星アニキ」が読者に問題を投げかけて、読者のためのページの運営方針にかかる議題を提示したり、読者＝「ヤング」に考えてもらう契機となったりしていた。

以上のように、「明星アニキ」は、読者が読者ページ内で展開した「私たち(ヤング) VS 大人社会(先生/親)」という関係の仲介役となり、「ヤング」の意見を相対化しながら「ヤング」と大人とを繋ぐ存在として機能していた。

## 5. まとめ

以上、第2章までは、1970年代という時期に着目し、そこにどのような社会的な背景があったのか、また、同時代の中での雑誌『明星』について触れ、第3章、第4章では特に1970年代の『明星』の読者ページに焦点を絞り、その具体的な事例として「ハローキャンパス」の分析を行い、どのような空間が形成されていたのか、どのようなコ



図2 誌面に登場した「明星アニキ」(1978年2月号より)

コミュニケーションが展開されたのか、その機能について考察を行った。

これらの結果得られた知見としては、まず、『明星』の「黄金の時代」は1970年代であること、そして、当時の『明星』の編集体制としては、写真家・篠山紀信を表紙への起用し、映画俳優から歌手へ、そして、「スター」から「アイドル」への移行という変化の中で、「大衆娯楽誌」から1970年代活性化しつつあった「女性マーケット」を意識した「アイドル誌」へという『明星』の雑誌としての位置づけの変化の片鱗も垣間見えたということである。次に、この時期の読者ページでは、進学率の上昇と相まって1970年代に市場化された「ヤング」という若者、特に中高大という学校に通う年代のための誌上空間が設置され、「ヤング」であることを合言葉にした「共同体」が形成されていたということである。また、そこでは、同時代のメディア上に登場する「スター／アイドル」との交流だけに留まらず、「スター／アイドル」のファンであるということを経験した読者同士の交流が行われていた。その空間においては、①読者からの投稿に「スター／アイドル」が返答する②読者からの投稿に編集者（専門家も含む）や読者が返答する③読者からの投稿（作品）をするのみという三つのタイプのコミュニケーションが展開されていたのだが、その中でも前二者を①読者-「スター／アイドル」交流型②読者-編集者／読者交流型として分析を行ったところ、具体的には(a)「スター／アイドル」はどうあるべきかについて(b)ファンの在り方について(c)「ヤング」が抱える問題についての議論が、読者からの投書だけではなく編集者からも、というように双方向からの問題提起によってなされていた。そして、読者は、その場所で、「ヤング」であることを共同意識として保ちながら「ヤング」ならではの問題や悩みを読者に打ち明けることで共有するとともに、「大人たち」のルールやタテマエに同調するのではなく、そこに「VS 大人社会」という対抗図式を交えながら「ヤング」としての水平的な仲間意識を強めていた。それは、芸能界で仕事を行いながら自らも学校社会に属しつつ共通の問題を抱える者、またはかつて抱えた者として「スター／アイドル」をも巻き込んだ共同体であり、これには、先述したような、当時の「スター／アイドル」の特性が寄与していると考えられる。すなわち、メディアで華々しく活躍する「スター／アイドル」といえども、読者である「ヤング」と同じような悩みを抱えるような「ヤング」の延長線上にある存在として読者が想定できたと見ることができ、このことは「スター／アイドル」の等身大性に特化していた『明星』ならではの傾向と捉えることもできよう。

また、以上の交流において重要な役回りを果たしていたのが編集者である「明星アニキ」という存在であった。「明星アニキ」は、特に「ヤング・ヤング・ボイス」というコーナー内で登場し、「ヤング」が繰り広げる大人社会との対抗関係に介入し、時には「ヤング」の意見に同調したり、または論じたりして相対化を試みたりしながらその仲

裁役として機能していた。「明星アニキ」は読者ページの中に形成された「ヤング共同体」と大人社会とを橋渡しする仲介役であったのである。それは、「アニキ」という名称も示すように、編集者が「ヤング」が抱く「大人」ではなく、学校に通うという共通の属性を持つ「ヤング」特有の「共同体」の先輩格としての捉え方であると見ることができる。

このように、本稿は、1970年代の『明星』では「ヤング」を基盤とした「共同体」が形成され、読者と「スター／アイドル」と編集者との双方向のコミュニケーションが行われていたということが結論として導き出せた。これは、「大人たち」に対抗する「ヤング」独自の文化の一例として提示できる。そして、これらは、阪本(2008)の1950年代の『平凡』の研究における知見のうち、若者の間で編集者も含めた連帯意識が形成されていたという点では共通する。しかし、それが「働く若者」ではなく、「学校に通う世代」が中心であったことという点では異なっており、これは飛躍的に進学率が上昇した1970年代という時代性を反映しての特徴と考えられる。

最後に、第2章1節の中で指摘したこの時期の「ヤング」として述べられていたことと、「ハローキャンパス」内での「ヤング」とを照らし合わせてみると、「大人文化を承認しない」「家庭における親子の断絶」という二つの側面を、本稿で導き出した読者共同体中の言説、特に4-3(c)の「「ヤング」が抱える問題について」という項目においても確認することができた。そして、この、大人(親)に対する不満を誌面において露呈させ、それを共有する、ということにより、「ハローキャンパス」における「ヤング」も同年代の間の「水平的なネットワーク」を形成している。つまり、『明星』の読者ページ「ハローキャンパス」内での「ヤング」は、大人(親)への不満を表明しそれを共振しあう手段として、雑誌に投書・投稿を行っていたと見ることができる。一方で、「大人文化を受容する、脚色する」という先行する「ヤング論」の中で指摘されていたもう一つの側面について考えると、「ハローキャンパス」内での「ヤング」言説からは一見されないばかりか、相反するように考えられる。しかし、そこに「明星アニキ」という存在を介することにより、編集者側(大人)のバイアスががかかっていることも推測できる。では、編集者側はどのような輪郭(世代/性別/思想)を有するものであったのか、さらに熟考する必要がある。今後の課題としたい<sup>(38)</sup>。

#### 注

- (1) 本稿における「読者ページ」が示しているのは、雑誌巻末辺りに数頁に渡って設置されたものであり、1頁のみのコーナーや単発の読者の声といったものではない。なお、「読者欄」と表記しないのは、以上のように、頁数が1頁以上に及んでいるものを指しているためである。
- (2) 阪本博志(2008), p.4
- (3) 『流動』1978年6月号, p.86
- (4) 座談会の参加者(集英社)は、集英社代表の陶山巖、同専務の本郷保雄、同営業長の山崎昇である。

(いずれも当時の役職である)

- (5) 『新刊ニュース』1952年9月号, p.4
- (6) 同掲書, p.6
- (7) 同掲書, p.6
- (8) 阪本(2008), p.10
- (9) 同掲書, p.13
- (10) 富永健一(1990), p.253
- (11) 大学(学部), 短期大学(本科), 大学・短期大学の別科, 高等学校の専攻科, 国立擁護教諭養成所へ進学した者のことである。
- (12) 1974(昭和49)年に男女の現役進学率が32.2%で同率になって以後は女子が男子を上回っている。しかし, 上記のように, この進学率には短期大学も含まれている。
- (13) 『流動』1978年6月号より
- (14) 『ブレーン』1971年6月号, p.2
- (15) 同掲書, p.4
- (16) 同掲書, p.13
- (17) 『ブレーン』1980年4月号, p.43
- (18) 阪本(2008), p.188
- (19) 創刊号から2002年までの『明星』の表紙を分析した橋本(2002)は, 「1970年代に『明星』は黄金の時代を迎えます。」と述べている。
- (20) 『集英社70年の歴史』, 尾崎・宗武(1979)より
- (21) 筆者が2011(平成23)年11月11日(金)独自に行った集英社の現在の『Myojo』の編集長の安藤拓朗, 副編集長の矢部正秋へのインタビューでも1970年代は『明星』の黄金期であったと語られていた。
- (22) 『GOETHE』2006年10月号, p.61
- (23) それまでの表紙は社内のカメラマンが撮ることが多かったが, この10年間においては, 篠山に加え, 表紙デザインはアートディレクターの鶴本正三を起用するなど, 外部委託していた。
- (24) 篠山はこの時期, 表紙撮影を担当したのみならず, 誌面でのグラビアページにおいても数多く登場し, 活躍を見せている。例えば, 1976年9月号から1977年2月号までは「篠山紀信シリーズ」が, 1977年8月号から1980年代に入るまで長期に渡り「篠山紀信話しながら撮ろう」という連載ページが掲載されており, 「篠山紀信」「撮・篠山紀信」というのがひとつの“売り”になっている。以上から当時の『明星』のビジュアル雑誌としての側面に篠山が寄与していたことは見逃せない。
- (25) 橋本(2002), p.10
- (26) 『GOETHE』2006年10月号, p.61
- (27) 阪本(2008), p.187
- (28) 2011年11月11日のインタビューより
- (29) 属性については, 「俳優」と「歌手」「歌手兼俳優」という三項目を設けたが, ここで「歌手兼俳優」としたのは, 特に1960年代以降, 俳優の中にも自身の主演映画の主題歌も担当するという, 具体的には吉永小百合のような例も多数存在するようになったためである。
- (30) 阪本(2008)も創刊からの『平凡』の表紙モデルの属性を分析し, 歌手の比重が1960年代後半から70年代にかけて俳優を上回るものになったと指摘している。
- (31) 『創』1982年7月号では「平凡出版 VS 集英社 大衆雑誌の徹底研究」と題した特集が生まれ『明星』は, 「先見の明」により, デビュー前やこれから人気が出そうな歌手に目をつけることに長けており, いわば, 「歌手に強い『明星』 役者に強い『平凡』」という特徴があったことも指摘されている。
- (32) 具体的には, 1964年5月号から「友の会」のページが消え, 「支部だより」というコーナーが読者ページ「愛読者ルーム」の中に組み込まれる形になった。そして, 1964年7月号には「友の会」の記載が目次ページからも消え, 同時に, 「働く仲間」というページの掲載が始まった。その後, 1964年4月号から新設されていた「クラス仲間」というページとこの「働く仲間」というページとが1965年10



月号より読者ページ「愛読者ルーム」の中の一コーナーとなるといった変遷があった。

- (33) ピーターとは、1969年にデビューした歌手兼俳優で、俳優としては「池畑慎之介」として活躍している。デビュー年には、『夜と朝のあいだに』で第11回日本レコード大賞最優秀新人賞を受賞するなど人気を博したが、その風貌から「男か女か」という議論が巻き起こったと考えられる。例えば、1970年6月号に寄せられた意見は、「気持悪いわ、グニャグニャして、あれでも男か。男のくせに化粧なんかして」や「ピーターって、テレビで見るよりもズッと男っぽくてカッコイイとしみじみ思いました。」というものがあり、容姿立居振舞を通じてジェンダー観を問うような内容となっている。
- (34) ここで「スター／アイドル」と両表記を行うのは、この1970年代という時期が研究者の間で「アイドル」という言葉がメディア上で多く用いられるとともに、概念が浸透していった時期であると見なされているからである。
- (35) ここでの「コーナー」は、1頁以上で、かつ、複数号に渡って同様のコーナーが設けられているものに限っている。また、表においては、例えば、似顔絵といった同じ趣旨と判断できるコーナーは一つにまとめる、または括弧付きで表記している。
- (36) 以上は一例に過ぎず、例えば、「原田真二は、ほんとうにアイドル歌手じゃないのだろうか? (岡山県・堀浩子) (78年9月号 p.220)」「カッコつけるな“ニューミュージック”党! (北海道札幌市・一郎) (79年8月号 p.230)」と、これと同様の意見や議論が他にも巻き起こっていた。
- (37) この時期の日本のジェンダー構造の変動については、「家族の戦後体制」という概念から家族制度や女性労働を見つめた落合恵美子(2004)が詳しい。
- (38) 同時に、ここで「ヤング」と定義する場合、例えば、年齢や性別、居住地域、また、職業の有無を含めて一体どのような世代や層を指しているのかについて、読者の属性に関するさらに詳細な分析を行う必要もあるが、本稿の趣旨から外れるため、稿を改めたい。

#### 参考文献

- 有山輝雄(2005)「メディア史研究における読者研究－視座の転換を目指して」『マス・コミュニケーション研究』67: pp.34-50
- 稲増龍夫(1989)『アイドル工学』筑摩書房
- 稲増龍夫(1990)「シミュレーションの快樂－現代アイドル文化考」『早稲田文学』8: p.26-33
- 太田省一(2011)『アイドル進化論』筑摩書房
- 尾崎秀樹・宗武朝子(1979)『雑誌の時代：その興亡のドラマ』主婦の友社
- 落合恵美子(2004)『21世紀家族へ 家族の戦後体制の見かた・超えかた(第3版)』有斐閣選書
- 児島和人(1988)「能動的受け手研究の探究－カルチュラル・スタディーズにおける経験的受け手研究の特質」『新聞学評論』37: pp.233-249
- 嵯峨景子(2011)『『女学世界』にみる読者共同体の成立過程とその変容－大正期における「ロマンティック」な共同体の生成と衰退を中心に』『マス・コミュニケーション研究』78: pp.129-147
- 坂本佳鶴恵(2000)「女性雑誌の歴史分析」『お茶の水女子大学人文科学紀要』53: pp.255-264
- 阪本博志(2002)『『平凡』読者の連帯と戦後大衆文化』『マス・コミュニケーション研究』60: pp.122-136
- 阪本博志(2003)『『平凡』の42年』『出版研究』33: pp.107-147
- 阪本博志(2008)『『平凡』の時代 1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』昭和堂
- 塩澤幸登(2010)『『平凡』物語』河出書房新社
- 中野収(1985)『若者文化の記号論－感性時代のヒーローウォッチング』PHP研究所
- 難波功士(2007)『族の系譜学 ユース・サブカルチャーズの戦後史』青弓社
- 橋本治(2002)『『明星』50年601枚の表紙』集英社新書

## The Readers' Community in “*Myojo*” during The 1970s : With a Focus on Results of “Hello Campus”

Yuki Tajima

---

This study aims at examining the change in the pages for readers in the magazine “*Myojo*” during the 1970s and attempts to understand how to enhance communication between readers and editors. For this purpose, this study analyzed the pages for readers, ‘Hello Campus’ and discussed about “*Myojo*” in the context of the 1970s Japanese society.

As the results of this, during the 1970s “*Myojo*” was considered ‘the golden era’ against the backdrop of the increasing advancement rate and the introduction of ‘the young market’, and ‘Hello Campus’ as the typical pages for readers in the 1970s’ “*Myojo*” constructed a community based on the concept of ‘young’, and encouraged interactive communication with readers, in particular among readers, using the editor as a mediator, and between ‘star/idol’ and readers.

**Key words** : Media culture, Magazine, Readers, Communication, 1970s